

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00670

研究課題名(和文) 不定詞節の発達とその生起環境の関係に関する通時的研究

研究課題名(英文) Study of the Historical Development of Infinitival Clauses and its Background

研究代表者

中川 直志 (Nakagawa, Naoshi)

中京大学・国際学部・教授

研究者番号：70321015

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：移動にA/A'の区別をしてきた生成文法にとって、その両方の特性を示すとされる tough構文の派生は、分析困難な存在であり続けている。その一方で、特に2000年代に入り、この問題に極小主義の立場からアプローチする研究が次々と発表されてきた。本研究においてはそれらの中から代表的な研究を分析した上で、tough構文の分析に当たっては、とりわけその歴史的発達の観点から、構文そのものの本質に対する考察が欠かせないという現時点での結論に達した。具体的には、tough構文はA移動による派生からA'移動による派生に移り変わる過渡期にあると考えるのが自然であると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特徴は、共時的立場からの理論的分析に通時的視点を加えることによって、共時的分析だけでは説明困難な現象について、より本質的な側面から分析することが可能になることを示唆していることにある。言語が常に変化の途上にあると考えるのが自然であるとするならば、現代英語を完全なシステムとして分析し尽くすことが困難であることは自明であり、不完全なところがなぜ不完全なのか、不完全な部分についてもコミュニケーションが可能なのはなぜなのかといった、言語分析に対する新しい「切り口」を提供することができると考えられる。

研究成果の概要(英文)：It is well-known that tough constructions have given two possibilities of their derivation: A-movement and A'-movement. Although it has been quite difficult to decide which type of movement is really suitable, some interesting approaches have recently been published which are trying to reconcile the two different kinds of movement. In this study, I have reviewed some representative approaches and pointed out that we should take into account one more perspective to solve the problem: a diachronic analysis of tough constructions, which suggests that tough constructions are in the half-way from the A-movement derivation to A'-movement derivation.

研究分野：英語学

キーワード：統語論 生成文法 英語史 不定詞節 tough構文

1. 研究開始当初の背景

申請者は生成文法の枠組みを用いて **tough** 構文における不定詞節の歴史的発達を研究してきた。その中で、**tough** 構文における不定詞節が他の構文における不定詞節と異なり、**vP** レベルまでしか構造を発達させていないという主張を行ってきた。

理論的研究においては、受動不定詞等の助動詞を伴う構文との共起が不定詞節の(**PP** から **VP** そして **TP** へという)構造の拡張を示す根拠とされている。すると、中英語期の終わりからルネサンス期において受動不定詞が **tough** 構文において広く現れるようになることは、この時期に **tough** 構文の不定詞節の構造が拡張したことを意味することになる。しかし、それでは、**1500** 年前後から **tough** 構文における受動不定詞が衰退したことが説明できない。これについては、**tough** 構文における受動不定詞の出現が、**Fischer (1991:177ff.)**の指摘する通り、“eager”構文からの類推であり、**tough** 類形容詞の範疇選択(**vP**)には変更がなかったため、不定詞節の構造が拡張することなく、受動構文における **be** 動詞が **Tense** に生成される時制要素と再分析されて以降、受動不定詞が **tough** 構文から衰退していったと分析できる。この間、他の構文では不定詞節の構造の拡張が進んでいたことから、**tough** 構文における不定詞節の構造の拡張は **tough** 類述語の選択特性により阻止されていたことを意味する。

この分析は、不定詞節の統語構造の発達が、その生起環境と無関係に進行するのではなく、生起環境によって影響を受けたことを示唆する。したがって、この示唆の妥当性をさらに追究する本研究の着想はごく自然なものであるといえる。

2. 研究の目的

本研究においては、理論的英語史研究と伝統的英語史研究の成果を融合することによって、不定詞節の歴史的発達のより詳細なメカニズムを記述することを目的とする。その結論は理論的研究と伝統的研究のいずれにも従来とは異なる視点をもたらすとともに、両研究の協働によって相応の成果が得られることを示すことになると考える。また、現在注目を集めるラベル理論の通時的分析への応用にも、その可能性を示すことが期待できる。

3. 研究の方法

本研究においては、**tough** 構文、**ECM** 構文、コントロール構文、繰り上げ構文等、様々な構文において不定詞節が現れた時期やその際の不定詞節の構造について、コーパス等による調査を用いて、実証的に明らかにする。その上で、**PP(NP)**から最終的には **CP** にまで至る不定詞節構造の拡張についてその出現環境の影響も踏まえながら、ラベル理論に基づいて明らかにしたい。そのため、以下のような方法を用いる計画であった。

- (1) 文献調査：先行研究ならびに関連分野における研究の調査。
- (2) 歴史言語コーパスを活用した調査：分析を裏付けるデータの収集。
- (3) 実地調査：一次言語資料の収集
- (4) 研究成果の発表：当該年度における研究成果を学会誌等で発表し、意見をj得る。

各年度の研究計画は、その目標に相関関係が高いので、順序が入れ替わる可能性があるとは考えていたが、特に実地調査については、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う行動制限のため実施できなかった。

4. 研究成果

移動(連鎖)に A/A'の区別をしてきた生成文法にとって、その両方の特性を示すとされる **tough** 構文の派生は、分析困難な存在であり続けている。その一方で、特に **2000** 年代に入り、この問題に極小主義の立場からアプローチする研究が次々と発表されてきた。それらの研究 (**Hicks (2009, 2017)**, **Obata and Epstein (2012)**, **Longenbaugh (2017)**, 等)の多くは、一連の移動の中に **A** 移動的特性と **A'** 移動的特性の両方を組み込ませるために何らかの特殊な仕組みを用意し、それに伴う理論上の問題を解決するために膨大な労力を注いでいると言えるが、本研究においては、とりわけ **tough** 構文の分析に当たっては、その歴史的発達の観点から、構文そのものの本質に対する考察が欠かせないという指摘を行った。具体的には、**tough** 構文は **A** 移動による派生から **A'** 移動による派生に移り変わる過渡期にあると考えるのが自然であると考えられる。

Van der Wurff (1990)は、**tough** 構文が、歴史的には、当初 **A** 移動によって派生されていたが、その後 **A'** 移動によって派生されるようになったと指摘し、**Nakagawa (2001)**はこの変遷を **tough** 節の構造の拡張の結果として捉えようとした。ただし、**tough** 節が **CP** まで歴史的に拡張してきたかどうかについて中川 (**2017**)は否定的立場をとっている。つまり、**tough** 節が **PP**、**VP**、そして **vP** へと範疇を拡大してきたという通時的分析が成り立つ一方で、現代英語の **tough** 節に対しては助動詞の具現や動詞句削除を許すような機能範疇を仮定することが難しいのではないかということである。また、**tough** 節の構造が (**CP** まで)未発達の状態であるとすれば、

それが A 移動的特性と A' 移動的特性を併せ持つことも不自然ではない。

以上の考え方は、千葉 (2019) の分析とも適合する。千葉は **tough** 構文の歴史的発達における主語読み (**tough** 節の主語を主節主語に関連付ける読み) の生産性が一貫して低いことを証明しており、これは **tough** 節が現代英語に至るまでその範疇を **vP** までしか拡大してこなかったという分析によって捉えられる。

参考文献

- Fischer, Olga (1991) "The Rise of the Passive Infinitive in English," *Historical English Syntax*, ed. By Dieter Kastovsky, 141-188, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Hicks, Glyn (2009) "**Tough**-Constructions and their Derivation," *Linguistic Inquiry* 40, 535-566.
- Hicks, Glyn (2017) "**Tough**-Movement," *The Blackwell Companion to Syntax*, ed. by Martin Everaert and Henk C. Van Riemsdijk, 4534-4560, Wiley-Blackwell, New Jersey.
- Longenbaugh, Nicholas (2017) "Composite A/A'-movement: Evidence from English **Tough**-Movement," MS, MIT.
- Nakagawa, Naoshi (2001) "Bare vP Analysis of the Infinitival Clause in OE: Historical Development of Tough Constructions," *English Linguistics* 18-2, 507-535.
- Obata, Miki and Samuel D. Epstein (2012) "Feature-Splitting Internal Merge: The Case of **Tough**-Constructions," *Ways of Structure Building*, ed. by Myriam Uribe-Etxebarria and Vidal Valmala, 366-384, Oxford University Press, Oxford.
- Wurff, Wim van der (1990) "The Easy to Please Construction in Old and Middle English," *Papers from the 5th International Conference on English Historical Linguistics*, ed. by Adamson, Sylvia, Vivien Law, Nigel Vincent and Susan Wright, 519-536, John Benjamins, Amsterdam.
- 千葉修司 (2019) 『英語 **tough** 構文の研究』, 開拓社, 東京.
- 中川直志 (2017) 「**tough** 節の範疇についての一考察: 共時的視点と通時的視点から」, *JELS* 34, 119-125, 日本英語学会.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中川直志、他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 言語の本質を共時的・通時的に探る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【書評】 対象図書：千葉修司 (2019) 『英語 tough構文の研究』, 開拓社 ; 掲載誌：『近代英語研究』第38号, 近代英語協会, 2022年7月, 査読有</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------